| | |
|---|---|
| 研究課題 | 誰も置き去りにしない持続可能な世界の構築に向けて |
| 副題 | ～あらゆる垣根を越えて協力し、より良い未来に向けて、持続可能な社会の創り手を育成する～ |
| キーワード | |
| 学校/団体 名 | 公立京都市立嘉楽中学校 |
| 所在地 | 〒602-8473　京都府京都市上京区般舟院前町 148 |
| ホームページ | |

## 1．研究の背景

本校は京都市の中央に位置している。2 小学校より生徒が入学し、令和 5 年度の全校生徒数は 222 名と小規模校である。小規模校のため、学年の枠を超えて生徒同士の仲が良いことが強みであるが、その反面、主体的な活動を通して生徒自身が認め合う「共感的な理解」や「自己決定の場」が作られてこなかった。このことから、教職員からの一方的な指導ではなく、一人一人が認められ「自己存在感」を与える仕掛けにシフトし、生徒自らが主体性を持った教育活動になるよう、本校では、平成 29 年度～令和 3 年度まで、国立教育政策研究所や京都市教育委員会の研究事業指定校として、研究テーマ「論理的思考」を皮切りに「主体的・対話的で深い学び」「表現力の育成」に取組んできた。しかしながら、「表現力の育成」については、コロナ禍で学校から笑顔が消え、生徒自身が本来持っていたはずの強みも失われ、道半ばで研究指定を終えてしまった。生徒アンケートからも友達同士の希薄さが読み取れ、何としてでも以前の子ども達の笑顔を取り戻そうと、引き続き令和 4 年から「表現力の育成」を学校運営の重点課題に掲げ教育活動に取り組んでいる。令和 5 年度はさらに生徒の「資質・能力」を伸長させるため、地域や外部人材を活用したキャリア教育を行い、これから訪れる「予測困難な社会」への対応力に繋がる機会と考えた。

## 2．研究の目的

現在の子どもたちが活躍するであろう、これから 10 年先では、想像以上の大きな変化が待ち受けていると想定されている。様々な知識や情報を「活用・発揮」しながら自分の考えを形成したり、新しいアイディアを想像したりする力を持った人材が求められていると言える。変化の激しい社会の中では、生徒たち一人一人に「何ができるか」が大切になってくるということである。つまり、将来の夢を実現するために、自分の課題について見通しを持ちながら自分の力で解決し、その結果の成果を基に、学びを振り返りながら次につなげるということだ。また、異なる他者と多様な対話をすることで、新しい情報が入り、説明する機会も増え、新しいものを作り出すチャンスも生まれてくる。さらに、生徒たちが問い続け、「どうしてだろう」「なぜだろう」と考え続けることが「深い学び」に向かうと考える。これらの点をふまえ、「今の課題は何か」「どんな生徒になってほしいか」「夢を実現するために何を身に付けさせるのか」を協議し、本校では「筋道を立てて思考する力」・「さまざまな事象を見つめ、的確に判断する力」・「思いや願いの実現に向けて自分自身を表現する力」を目指している。

３．研究の経過

○文化芸術による子供育成推進事業(芸術家の派遣事業)　令和４・５年度研究指定

○京都芸術教育研究事業(京都市教育委員会後援)　令和４・５年度研究指定

○「生き方探究チャレンジ体験」に向けて企業リサーチ(6 月)　2 年生

・体験事後プレゼン　1・2 年生

○あしあと検定(6 月・11 月)　全学年

○小中交流合唱交歓会(9 月)　2 小学校 6 年生・中学生全学年

○文化祭(10 月)

・演劇 3 年生による「平和劇～沖縄戦～」

・教科横断的な研究発表

・パナソニックプレゼンテーションコンクール 2023 の応募

○インターナショナルスクールとの英語交流(11 月)　1・2 年生

○横浜国立大学教育学部附属横浜中学校視察(11 月)　教員研修

○面接検定(12 月)　全学年

○第 15 回ユネスコスクール(1 月)東京開催　教員研修

○高等学校・大学訪問(2 月)　2 年生

○私の行き方発見プログラム(2 月)　1 年生

４．代表的な実践

○文化芸術による子供育成推進事業（芸術家の派遣事業）【令和４・５年度研究指定】

プロの俳優さんの演技を学び、
シーンの１場面を創作

・芸術家の派遣により、生徒の豊かな想像力・創造力や思考力コミュニケーション能力などを養うとともに、将来の芸術家や観客層を育成し、優れた文化芸術の創造を目的に実施した。劇団員と国語科との綿密な打ち合わせを行い、国語の授業「故郷」という作品を通して、表現力・読解力の向上をはかる。全５時間の講義＋体験型に構成され、自分の生き方や社会との関わり方を支える読書の意義と効用について、ま理解した、自分の考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつことができ、さらに、読書を通して自己を向上させ、思いや考えを伝え合おうとする資質能力を養うことができた。

○京都芸術教育研究事業（京都市教育委員会後援）【令和４・５年度研究指定】

・人権教育を基盤とした、「キャリア教育」と「平和教育」を通して、舞台芸術の世界について学ぶ取組の推進として「人権」をテーマとした「演劇」を軸に、これまでにない新しい視点を踏まえながら研究し、生徒の表現力を爆発させたいという思いと、また、本校が大切にしている、「人権を基盤とした学習指導と生徒指導の一体化」を目指し、人権問題という身近な問題に対し、関心を持ち、それを解決することができる力を付けさせ、そして、創作過程における生徒の活動と京都市立芸術大学による指導の両輪を教師がコーディネートし、双方向の関わりを重視しながら、演劇を通して、生徒一人ひとりの居場所と絆を育む仕掛けを作り、そしてまた、京都市の

芸術教育の普及に貢献させたく研究事業に取り組んだ。

○文化祭

・上記、文化芸術による子供育成推進事業ならびに京都芸術教育研究事業によって培われた表現力は10月に行われた文化祭において、3年生による人権劇でその成果を発揮することができた。大学教授の講義では、創作技術のポイントを聞き、学生は生徒主体の創作になるよう、アドバイスよりも、生徒の考えを承認しながら、良い方向付けになるような支援のみとした。また、当時の情景を自分事のように表現するには、修学旅行先である沖縄の民家宿泊体験学習で、実際に民泊の方から沖縄戦の辛かった思いや現在の願い、基地問題など、現地の方から聞き取った言葉を劇のセリフの中に取り入れる必要があった。台本は自作で制作し、音響・大道具・小道具・照明・美術など演出にこだわりを持って学年全員で作りあげた作品となった。

大学教授から芸術の世界を学ぶ

大学生も初めてのコラボに試行錯誤

・授業の単元振り返りプレゼンテーションと興味を持った事象のプレゼンテーションについて、文化祭で発表してみたい生徒を募集したところ、約10組の個人またはグループの応募があり、「あつまれ動物の森の人のポケットには、どれくらいの人が入るの？」「確率の不思議～同じ人の誕生日は何%～」「数学が苦手な人でもわかる～1から100の足し算を10秒で解く方法」「検証～シュークリームの上手な食べ方～」など日頃の何気ない疑問について真面目にユニークに発表する姿に、聞き手も興味を持ちながら、小さな空間の中で発表しているかのような一体感のある温かい雰囲気が感じ取れた。

・昨年度まで文化祭で実施していた「私の主張」から、今年度はパナソニックプレゼンテーションコンクールに応募することにシフトした。将来を見据え、プレゼン力を身に付けるため、1年生では「自分の好きなもの」、2・3年生では「人との関わりを通して、自分が変わるきっかけとなったこと」を題材に、全校生徒に取り組ませた。まず、各学級で一人一人が発表し2名の優秀者を選定、学年大会で最優秀者1名を選出し文化祭で発表した。プレゼンテーションコンクールには2・3年それぞれ1名が応募し、体験したことを自分なりに深く考え、それを分かりやすく人に表現したい気持ちが、全校生徒のみんなの心に響いていた。また、最終選考には残れなかったものの、人との素晴らしい出会いや体験を大切にし、それを自分なりの将来の夢や希望にどう生かすか考えることができる文化祭になった。

○キャリア教育

・2年生時に実施される「生き方探究チャレンジ体験」に向けて、1年生では地域調べと職業体験事前学習にパナソニック提供の「私の行き方発見プログラム」を実施。2年生では、職業体験の振り返りと、高等学校より先の進学を見据えた大学訪問を取り入れた。この校外学習や外部人材派遣事業は、2年生に実施される職業体験の事前学習として

取組み、興味・関心を持たせることができる。また、小中連携の一つとして、小学校で取り組んでいるSDGｓやユネスコスクールに登録していることで、中学校ではさらに深く探究する取組を継続している。

・右の写真は、洋服の販売店にSDGｓについて質問している様子で、班ごとに異なった業種の事業所を事前に調べ、質問内容を検討し、調査した内容をロイロノートにまとめ発表した。ただ単にSDGｓ17の項目に当てはまるかどうかの知識に留まることではなく、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を得てGIGA端末などを活用しながら、課題の発見・解決できる資質・能力の育成に努めている。

企業訪問先でインタビュー

・2年生では、6月に実施した「生き方探究チャレンジ体験」に引き続いて、キャリア教育の一環で、大学訪問を実施した。訪れた大学では、建学の精神に基づく「良心教育」を展開し、個々の学びを探究する到達点に、SDGｓと関連付けて、社会面・環境面を考慮しながら、経済活動を持続可能な形で発展させるための研究をしている学生の紹介があった。本校の生徒たちは、「中学生にできるSDGｓは何か」といった質問が多く、自ら主体的に社会に貢献しようとする姿や、将来の夢を実現するために、これからの中学校生活について深く考えることができた。

大学で取り組んでいる
ＳＤＧｓを調査

・本校独自で実施している面接検定では、3年時における進学・就職のための模擬面接ではなく、3年間の継続的な取組として、「話す力・思いを伝える力」をつけるべく1年生から取り組んでいる。学級では事前に面接の基本的な知識を習得してから、教頭・校長が面接官を担当する。事後指導として、次回の面接検定だけでなく、日々の授業にも生かすために振り返りを重視している。1年生は、「自己ＰＲ」「身近な出来事」「1年間の振り返り」、2年生は、「1年間の振り返り」「社会の出来事」「未来の大人像」などの質問内容について、「根拠を示し・順序立てて・簡潔に伝える」ことを注意しながら、相手が納得するように返答しなくてはならない。

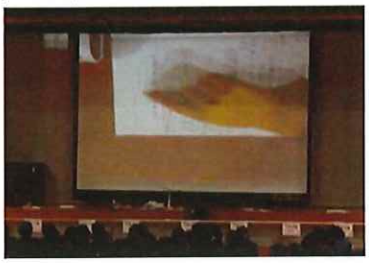
面接検定の様子
1年生～3年生全校実施

○あしあと検定

・国立教育政策研究所指定の研究をスタートした、平成29年度から継続実施している。生徒が「筋道立てて思考し、判断し、表現する」様を見取りながら、同時に促進していくようなノートづくりのありかたの研究を進めてきた。生徒一人一人を認め、自己有用感を感じさせることや教員が他教科のノートを検定することで授業改善の役割も果たせた。校区小学校においても、令和2年度から年間1～2回の「ノート検定」を実施していただいている。中学生は、小学校から「あしあと検定」の経験を積んだ生徒であるため、質の高いノートづくりができるようになった。質の高いノートづくりとは、黒板を丁寧な字や色分けして書くだけではなく、「他者の意見が書かれている」「大事な気付きにはメモが書かれている」「自分の考えをまとめて記述されている」「学びの順序がわかる」「振り返りが記入されている」などの具体的な項目があり、指導者は必然と、授業改善と授業力向上が不可欠になるため、教科会の充実により、教員全体の指導力向上

の底上げになるよう日々取り組んでいる。日頃の教科学習において、グループワークの際に『こ・じ・か』タイムをキーワードとして設定している。「根拠(こんきょ)を示し・順序(じゅんじょ)だてて・簡潔(かんけつ)に伝える」の頭文字をとっており、授業だけでなく、あらゆる学びの場面で意識させ活用させ、表現力の育成のため、授業だけでなく、あらゆる学びの場面で意識させ活用させている。

どの単元のノートを検定するのかは、体育館に集合してから学習協力委員によって知らされるため、日頃からノート作りに取組まなければならない仕掛となっている。１級ノートは全校生徒に紹介され、担当教員から良かった点をみんなで共有する。



小学校で取り組んでいる
プチあと検定

小学校では、中学校とは異なり、教師は級の判定ではなく、良い部分をほめることが中心となっている。金色のシールを貼ったり、教員が良い点をカードに記入してコミュニケーションを交わしながら返却している。また、小中連携の一つとして、中学生のノートを、端末機を活用して児童に紹介する活動や、児童の優秀なノートを中学校で紹介する活動も展開した。

○小中交流合唱交歓会(9 月)

・校区小学校の６年生児童と中学校１年生～3 年生で実施。学校紹介があり、各学年の合唱を披露した後、子どもたち全員で合唱を響かせた。閉会では中学生と児童とが、互いの歌声の感想を交換し、中学校入学を楽しみしている言葉など満足感が得られる取り組みとなった。児童の合唱練習は、本校の音楽教員が、それぞれの小学校に出前授業を数回行い本番に備えた。中学生（美術部）が描いたポスターをＰＴＡの自宅や、地域の掲示板・保育園・幼稚園などに掲示し、多くの保護者や地域の方々に参観に来て頂いた。

保護者や地域の方々を招待

○異文化交流

・本校で、もう一つ大切にしていることは、多様性の教育である。人権を基盤とした学習指導と生徒指導の一体化を目指した取組に、朝鮮初級中級学校との交流会、多様な国籍の同年代のインターナショナルスクールとの交流会を取り入れ、教科横断的（国語・社会・英語・音楽・道徳）になるよう工夫し、生徒たちが新たな価値観や多様性を創造し、交流を通して実社会での問題発見・解決に生かしていくための学習を推進している。

アイスブレーキングで
コミュニケーション

文化交流だけでなく、人権教育も
取り入れている（ＳＤＧｓ）

５．研究の成果

〇生徒アンケートから

・主体的に授業に取り組めた…83%　・苦手なことにもあきらめず取り組もうとした…81%

・グループで意見交換することが楽しい…92%　・授業がよく分かった…86%

・自分の考えを道筋立てて説明できた…77%　・道筋立ててノートをまとめた…83%

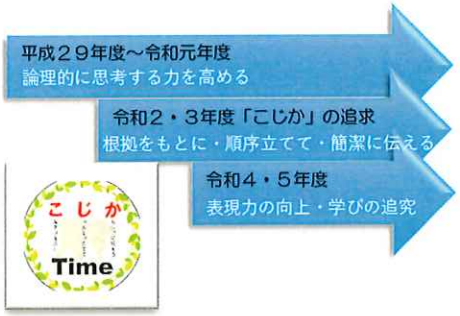
・大勢の前で発表することに自信が付いた…83%

〇「表現力の育成」を育む 教職員の資質・能力

・主体的に学習環境を整える習慣が身につき、それぞれ独自の取組を考えることで、相乗効果によって新たな発想が生まれ、学年や学級ごとの取組においても、生徒の企画を取り入れ運営する力も付いてきており、併せて創造的で、独自性が見られた。

・最新の教育に興味を持ち、学び続け、生徒や地域に応じた教育を見つけ出し、生徒と同じように、教職員も「とにかくやってみる」が大切である。リスクマネジメントも含め企画を実現化し、できることを増やし、ブラッシュアップと新たなスタートアップにつなげていく。

６．今後の課題・展望




今後も「こ・じ・か」といった話す力の向上とともに、社会につながる表現力を真に養うためには、様々な学びの必要性を改めて気付かされた。学びには、一面的ではない見取りを試していかなくては、「社会につながる表現力」にはならないということである。生徒に付けたい「資質・能力」は、パフォーマンス課題などを用いて、主体的に考えて話をする場面をすべての教科の授業の中に設定し、生徒自らが意識しながら表現力や自信も芽生えることで、より主体的になっていくという好循環が生まれる。また、授業の中にスモールティーチャーの活躍の場も設け、生徒同士が主体的、協働的に学んでいける環境を構築し、資質能力の育成についても、計画的に取り組んでいく。指導者はただ単に「表現力」の姿を求めるのではなく、将来の自分を意識した社会に、教科や教材、外部人材を通して成果と課題を踏まえつつ、今後も生徒を舞台にあげる場面の工夫（主体的な学ぶ姿勢作り）を続けていくこと、教職員自らが常に学びあう質の高い集団であることが、本校が邁進したい今後の方向性である。

７．おわりに

本校はこれまで、国立教育研究所の指定、京都市教育委員会実践研究事業の指定を受け、社会の中で活用される論理的思考やそれらを表現する力の育成において、教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に取り組んできた。そして、さらなる成長と課題解決に向け、子供たちが、情報化やグローバル化といった急速に加速する社会の変化に関心を持ち、他者と真剣に向き合い、主体的に取り組む姿勢を身に付けさせることを目的に、教職員も、「何ができるか」「何を身に付けさせるか」を考えて、新たなアイディアと工夫を凝らしながら教育活動を進めていかなければならな

い。最後に、パナソニック教育財団２０２３度（第４９回）実践研究助成に選出していただきまた、財団関係者の皆様には大変お世話になり、深くお礼を申し上げます。

８．参考文献

・香川大学教育学部附属坂出中学校「わたし」が変わる「ものがたり」の学び　※研究冊子
・「論理的思考・表現力育成のためのカリキュラム」　・「カリマネで学校はここまで変わる」
・「資質・能力を育てるパフォーマンス評価」　・「東大生のノートはどうして美しいのか？」
・「知の総合化ノートで具体化する２１世紀型能力」　等